

長浜別院大通寺本堂調査報告

伊藤 延 男

はじめに

大谷大学では、二〇〇八年度より、真宗総合研究所内に真宗本廟（東本願寺）造営史研究班を組織し、鋭意伽藍造営の史的研究を行っており、あわせて各地の別院その他の寺院に残る史料の調査も行ってきたところであるが、その一環として長浜別院大通寺について、本堂建築を主とする調査を行ったので、ここにその概要を報告する。

いうまでもなく長浜別院大通寺は、東本願寺にとって重要な別院であり、ことに本堂には、伏見城の殿舎を贈られて建てた東本願寺御影堂をさらにここに移したとの伝承がある。しかし昭和二十七年に刊行された修理報告書¹が伏見桃山城からの移築説を否定したこともあり、今日では移築はあり得ないという意見が大勢を占めている。近年長浜市教育委員会によって地道な史料や建築部材の調査が行われ、研究が深められているが、それでも本堂建築の歴史の全貌はまだ見えていないというのが実情である。

今回研究班が本堂の構成部材に残る各種痕跡や墨書等の調査を文献調査も加えて行った理由は、このようないわば手詰まりの状態を一步なりとも進め、もって本堂の歴史解明に寄与できることを願ったからに他ならない。

しかしながら、大通寺は全国的にも名高く、また地元長浜の人々の厚い信仰に支えられた寺院であるので、法要が行

われることもしばしばであり、参詣の人数も多く、内部ことに内陣周りの調査は至難かと思われた。しかし寺御当局のお計らいで二〇〇九年十二月二―三日に堂内の詳しい調査を行うことができた。さらに、この調査によって得られた結果の確認と補充のために補足調査を願ひ出たところ、これまた御許可を頂くことができ、二〇一〇年三月十日に実施することができた。ここに改めて厚く感謝の意を表したい。また長浜市教育委員会主幹二宮義信氏からは文化財保護当局としての御指示に加えて、建築専門家としてこれまで調査されてきた結果を余すところなく御開示頂いた。調査が無事実施できたのは、ひとえに氏の御指導によるものであり、深く感謝申し上げたい。

調査班は本論末尾に氏名を記した者で構成されたが、計画を聞き、古建築修復技術の第一人者である伊原恵司氏(真宗本願両堂等御修復委员会主任技術専門員)をはじめ、目下山本山両堂修復工事設計監理の任に当たっている日建設計の二宮彰、足立修一郎、進 真由子の各氏、ならびにたまたま大通寺建物の修理を担当しておられる橋本工務店主橋本市郎氏のご参加を得た。能率よく調査の成果を得ることができたのは、各氏の御援助、御協力の賜物と感謝いたす次第である。

一 本堂の現状と調査事項の選定

大通寺本堂は、大正四年三月二十六日、当時の古社寺保存法により「特別保護建造物」に指定されたが、のち昭和四年法律が国宝保存法となったので名称が「国宝」と改められ、さらに昭和二十五年文化財保護法となるにつれ「重要文化財」と改称されて今日に至っている。『国宝・重要文化財建造物目録』(文化庁編)によれば、その構造及び形式は、

桁行正面五間、背面九間、梁間八間、一重、入母屋造、向拝一間、背面一間通り庇付属、本瓦葺

とある。この桁行、梁間の間数は、何れも広縁先の柱間で数えた数であって、実際の長さを現したものではない。この本堂は、通常の仏堂とは異なり、その内外陣回りをみると分かるように、柱が一定間隔で建っている。この柱間を基準長さ一間(この建物では七尺二分程)²として数えると、桁行一三間(外陣総幅九間、両脇広縁幅各二間)、梁間一二間(前から広

縁二間、外陣下の間五間、外陣上の間二間、内陣三間³、後堂付きとなる。これを実際の寸法に直せば、桁行九一・二六尺《二七・六五五m》、梁間八四・二四尺《二四・五二七m》程に後堂を加えた長さとなる。建立年代は、正面高欄擬宝珠の刻銘により、明暦三年（一六五七）とされる⁴。

現状がこのようなになっている本堂をいかに調査すべきか。まず、堂内を一見して内陣と外陣では構成が全く異なることに気付いた。内陣は、すべての部材の木割が太く、材質はヒノキと思われ、しかも部材を転用した跡が各所に見られる。これに対し外陣上間、同下間、広縁周りには、木割がやや細く、材質は草檜であり、移築、転用を思わせる痕跡もない。よって調査は内陣部分のみに限定し、加えて、かねてよりその存在が指摘されていた天井上及び床下の番付の精密な調査を行うこととした⁵。

二 内陣部分の調査結果

今回調査の対象とした内陣は、正面を外陣上間に接し、背面を後堂に接する部分で、奥行は三間、正面は実長で九間分である。この九間を三室に分け、うち中央五間分を内陣とする。その柱配置を見ると、正面側は五間分の内に柱二本を立てて同じ幅の三間になるようにしているのに対し、背面側は中央を七尺の一間として後堂への出入口とし、両脇は二間分を通しの一間として脇仏壇を設けている。左右脇間との境には一間毎に柱を立てる。また内陣内部の後寄りに丸柱の後門柱を立て、前に須彌壇を置く。次に両脇間は、正面二間、側面三間で、背面は二間分通しの脇壇とするが、他は一間ごとに柱を立てる。

内陣の左右にはなお部屋が続く。まず脇間の両脇二間分、即ち広縁突き当りを控室とし、更にその先落縁突き当りにも一間幅の間（鞘の間）が付く。鞘の間の先は左右で相違がある。左（向って右）では一間の庇を付けて落縁を回して後堂への通路としているが、右では鞘の間先に更に二間幅の部屋がつき、一体化して方三間の付属の間になっている。以上

の部分でも柱はほぼ一間毎に立っている。

内陣の柱は面取方柱で、総幅は九寸、面内七寸八分である。表面は漆塗、金箔押としている。柱間には内法長押、飛貫、天井長押を入れる。なお、内陣は床を漆塗板敷、天井を格天井とするが、脇間、控室などは床畳敷き、天井棹縁天井とする。

今回は先ず内陣部分を目視で調査した。勿論解体に伴う調査のような徹底的な調査ではないので、十分な結果が期待できる由もないが、次項に述べる床下調査の結果も考え合わせ、概ね次のような成果を得た。

(1) 内陣正面は、既述のように、五間分を三間に割っているが、もとは五間に割っていたことが古図「御建屋図絵」⁶によって知られる。この図絵は、江戸時代文化九年から文政九年の間(一八一二―一八二六)に制作されたものとされている。⁷現在も、長押等を調べると、一間毎に柱四本が立っていた跡が残っており、礎石も残存しているから、五間に割っていたことは間違いない。

(2) では、内陣が五間であった時期以前に三間であった時代はなかったか。内陣正面三間の制は浄土真宗本堂の原則であるし、またそうであれば外陣内部の柱筋と一致し宗派本来の姿になる。このことは、内陣を三間とした場合の四隅の柱を見れば判明する筈であるが、それらの柱はすべて現存しないので、直接的には証明できない。しかし、内陣と脇間との境を成す間仕切りが柱と共にごっそり移動していると思われるから、古くは内陣正面が三間であったに違いない。

(3) 内陣の部材がこの本堂建立時(明暦三年)以前のものであるならば、どれ位古く、どんな経歴を持つのであろうか。まず柱の面幅が、見付幅(柱を正面から見た時の面幅)で柱総幅の一割よりも狭く、面なり(面に沿って計った幅)で一割(見付幅に直すと約七分)であって、いわゆる桃山風とは言い難いが、慶長年代であれば許容範囲といえるのではなかろうか。長押の形状も近世風ではあるが、やや古式である。柱の幅は前述のように九寸であるが、微妙に細

い柱もあるから、一度あるいはそれ以上表面が削られている可能性がある。柱の表面は漆塗金箔押になっているが、これは後の仕事とみられる。注目されることは、柱間装置（壁窓・建具など）の取り付け痕跡がほとんど見出せないことである。たとえ金箔押しとなつていても詳細に見るとこの種の痕跡は必ず発見できるはずであるので、不審である。どこかの建物の旧材が使われたとしても、その前身建物は、完全に竣工した建物ではなかったのではないかと疑いを起させる。これに反し、長押等の横材には切り使いと思われる痕跡がたくさん見られる。これは移築の歴史を示すものと考えてよい。

(4) 後堂出入口左脇の柱（番付「百十六」）上部に取り付いた長押の切断面からみて、ここから前方に向つて部屋境が延びていた時期があるかもしれない。しかし、詳しくは分からない。このような不明な痕跡は、探せばまだあるだろう。

(5) 内陣から後堂に突出する脇仏壇の背面柱にも古い柱が使われている。内陣改造のため不要となった材を転用したのであろう。

三 部材番付の調査とその結果

大通寺本堂からは三種の番付が発見された。

番付①は、内陣と右脇間境の前から二番目の柱頭部で見出された番付で、「十四ノか」とあった。これはいわゆる組み合わせ番付であり、江戸時代以来今日まで広く用いられた方式である。普通はい、ろ、は……を横軸とし、一、二、三……を縦軸として、「いノ一」から始まるが、ここでは、「十四ノか」と書き方の順序が逆であり、異例といえる。ところが、床下には、内陣正面通り柱二本に「十三」の墨書、右脇間と控室境の前から二列目柱に「十四」、内陣背面の柱に「十六」の墨書があつて、数字が縦軸方向であることが分かる。そこで試みに現在の平面図（図1）に組み合わせ番付を

付けてみた。⁸ そうすると、「十四ノか」の位置が的中した。番付が現在の本堂に適用できること、位置が内陣左側に集中していること等から考えると、この番付は内陣を五間にした時の工所用番付であった可能性がある。

番付②は、小屋組内に多くみられる墨書番付であって、やはり組み合わせ番付である。縦軸は本堂奥の「や」を起点とし前面の「あ」に終わる。いろは番付の後半部分を使ったのであろう。一方の横軸は、左側面から右側面へ「一」から「十三」に至る。この番付は、牛梁上の初重小屋梁組を支える束又は入母屋妻の束に付けた番付と考えれば肯首でできる。とすれば、この番付も現本堂時代に対応するものであろう。

番付③は、内陣柱の床下部分に見られる筆字番付で、大きめに墨書きされた番付文字の縁に沿って丁寧に鑿立てしたたいへん珍しいものである。⁹

本堂床下の調査は、左右とも現在の控室床下まで行うことができた。しかし、その先へは、床下に仕切りがあったので、進めなかった。発見された番付は、「七十四」から「百二十三」にまで及ぶから、数としては五〇個となるが、実際には、柱がない場所や番付が見つからなかった柱があったので、判読出来たのは、部分的判読を含めても、二五カ所に過ぎなかった。しかし数字が比較的顺序良く並んでいたので、内陣前列を右（向って左）から左まで一間毎に進み、次の奥の列は左から右へ柱の立つ所だけ番号を付け、その奥の列は折り返し右から左へ柱のある所を進み、そして内陣後列はまた左から右へ一間毎に進む、いわゆる時香番付形式であることが容易に判明した。¹⁰ 数字を整理してみると更に細かいことが発見された。第一に、筆字番付が及んだ範囲は、左側面が更に二間延びて桁行一五間、梁間三間となることが分かった（図2）。第二には、柱「百九」が元は一間左に立っていたと推定された。第三に、左辺部分には平面を決定出来かねる部分があり、図2に示すように理論的に三案が考えられることも判明した。目を右辺に移すと、第四に、時香番付の特性から、現在は柱のない「九十七」「百」に柱がなければならないという結論が出た。次に、第五として、内陣前列では左端四本の柱は番付順序が大いに狂っている。これも、この部分が何時か解体再組立された時期のあったこと

を示すのであろう。以上の考察はこの番付をもつ部分の歴史を考える上にたいへん重要な示唆を与える。

四 総合的考察と展望

今回の調査結果から、部材に付された番付のうち、内陣部分に見られる箒字番付③が外陣部分より古く、かつかなりの改造を受けていることが明らかになった。では、この結果は大通寺本堂の歴史といかに関わるのであろうか。

まず考えておかねばならないのは、広間との関係である。寺伝によると、本堂と広間はともに伏見桃山城から東本願寺を経て大通寺に移されたという。だが建築の材料、工法、様式などから見ると、本堂外陣周りが明暦三年に建てられたのに続き、一連工事として広間が建設されたと考えるのが妥当な線であろう。その時本堂は、何処からか移築されてきた内陣に合わせて柱間七尺としたが、広間はその当時常識となっていた一間六尺五寸に決められたと考えられよう。とすれば、問題は内陣の由緒に絞られる。しかしこのことだけでもきわめて困難な問題である。もし完全解明の時期があるとなれば、それは数百年後の次期解体修理時まで待たねばならないであろう。だから今あまり立ち入った推察を加えることは差し控えるべきであろうが、ここで一応の考察を加え、将来のため展望を行っておくことも無駄ではあるまい。問題は、大通寺本堂内陣が(1)はたして伏見城の建物を移築したものであるか、(2)東本願寺旧御影堂を移築したものであるか、の二点に尽きる。

(1) 大通寺本堂内陣は果たして伏見城の遺構なのか。

柱に残る箒字番付から考えれば、大通寺本堂内陣前身建物の規模は、桁行一五間、梁間三間と長い。城郭建築であったとすれば、番付が半端な数字に始まり、半端な数字に終わることから見て、長大な渡櫓の一部か、あるいは連続するいくつかの渡櫓のうちの一棟を想像する他あるまい。

伏見城は文禄元年(一五九二)豊臣秀吉によって始められた城郭で、秀吉没後は徳川家康の居城となった。しかし関ヶ

原合戦に先立って大坂方に攻められ一旦落城した。のち慶長六年（一六〇一）から本格的な復旧工事が行われ、家康の重要な居城の一つとなった。慶長七年（一六〇二）六月に家康は諸大名に山城伏見城の修復を行わせて一旦江戸に帰るが、十二月には再び伏見城に戻り、翌八年（一六〇三）十月までここに滞在した。一方東本願寺は、慶長七年（一六〇二）寺内の地を取得し、翌八年（一六〇三）御影が到着し、仮御影堂が建設されたのであるから、時間的には齟齬はない。しかし東本願寺は、発足当初本願寺（現西本願寺の地）北舎を移して御影堂としたと伝えているから、伏見城伝來說の成立は困難であろうと思われる。

（２）大通寺本堂は東本願寺旧御影堂を移築したものであるか。

まず、大通寺本堂内陣前身が元の東本願寺御影堂の一部であったとしたら、その堂はどんな規模であったであろうか。内陣右側、現在の控室が元は幅一間の空間二つになることを考えると、当初の建物は、総幅九間の外陣と幅一間の落縁（先端に縁支柱付）、合計正面一一間の建物であったと考えられる。そこで、奥行が現在の本堂と同じ長さだったと仮定して平面を想定し、前面一隅を起点とする時香番付を付けてみると、細部では問題が残るが、おおむね内陣の番付に接続する。つまり、現在の本堂から両側の広縁を除いた建物を想定すれば、番付の問題は合理的に解釈できるのである（図3）。

ひるがえって東本願寺の御影堂の歴史を一瞥しよう。最初の仮御影堂は、慶長八年（一六〇三）五月西本願寺北舎の御堂を移築し、六月完成、十一月遷仏・遷座を行ったところである。ところが、翌慶長九年（一六〇四）改めて御影堂の新築があり、六月立柱、九月上棟、遷座が行われた。更に慶安五年（一六五二）いわゆる明暦度造営が始まり、明暦四年（一六五八）新御影堂の上棟、遷座をみた。大通寺本堂は擬宝珠銘にある明暦三年（一六五七）の造営であるから、丁度不要になった旧御影堂を譲り受け移築したと考えても、時期的には合う。しかし慶長九年造営の御影堂は、寛永十九年頃制作された「洛中絵図」に、正面二二間半、側面一八間と記されていて、過大であり、またこの堂は後年移築されて集会所

となったと伝えられているから、大通寺への移築は考えられない。

だが、この洛中絵図に描かれている「広間」に着目してみたい。ここには、正面一一間、側面一三間半の記載がある。この建物の由来は不明だが、本願寺造営の歴史を紐解いてみると、旧堂や仮堂を再利用している例が多いから、慶長九年の造営に当たり、前年移建したばかりの旧御影堂を移して、広間に転用したと考えても必ずしも荒唐無稽とは云えないであろう。

尤もこの考えにも難点がある。なぜ旧堂＝広間をそっくり移さなかったのか。理由は、外陣部分が粗末であったとか、あるいは内陣部分の材料だけ辛うじて運んだのだとか、いろいろ考えられようが、すべて推察の域を出るものではない。だが、正面一一間、左右広縁なしの平面が大坂天満本願寺時期御堂以来の平面であったらしいことから考えると、正面一一間という規模こそ本願寺にとっては由緒深い正統的な標準平面であったのではなからうか。なお、奥行きについては、想像による部分が大きいので、あまり強く主張するわけではないが、背面に狭い半間の後堂を付ければ、図に云う一三間半となり、「洛中絵図」の広間と符合する。

以上要するに、大通寺本堂に東本願寺の最初の仮御影堂の内陣部分だけが移築されているとする推察は、まだ一仮説の域を出ないものではあるが、将来の研究への一步となると信じ、ここに敢えて提示した次第である。

註

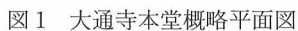
- 1 『重要文化財大通寺本堂及広間附玄関修理工事報告書』（滋賀県教育委員会 重要文化財大通寺修理事務所、昭和二十七年五月）。執筆者である現場主任吉田栄吉氏は移築否定の根拠として、本堂の部材が、同じ時期に建てられたとされる広間、庫裏と同じ草槓であることを挙げているが、本堂内陣部分の柱がヒノキの類であることには言及していない。
- 2 『重要文化財大通寺本堂及広間附玄関修理工事報告書』による。但し柱間寸法には若干の濁りがある。
- 3 部屋の呼称も『修理工事報告書』に従った。従って現在の呼称とは若干異なる所があると思われる。

- 4 「高欄擬宝珠刻銘」(左右一対)
明暦第三丁酉載「仲夏三鳥」再興「靈瑞院從高」金寶珠「奉寄進願主」安海寺貞須
- 5 『長浜市歴史的建造物調査報告書第一集 長浜市の未指定歴史的建造物』(長浜市教育委員会歴史文化課、平成十七年三月三十一日)には本堂について詳細な記述があり、調査の参考資料となった。
- 6 平成十年から長浜城歴史博物館・滋賀県立近代美術館・彦根城博物館共同で行われた文化財調査により発見されたものである。
- 7 図の制作年代判定は『長浜市の未指定歴史的建造物 一』による。
- 8 平面図に付けた番付は、いわば柱番付であるから、すべての柱筋に番付を打ってゆくのであるが、側柱の外にも番付を付けることがある。必要のない所にも打っておくいわば捨番である。これは現在でも行われている通常の手法である。
- 9 建築の番付は墨書きが通例であるが、慶長頃に限って鑿った文字が現れる。代表例は大阪府金剛寺多宝塔である。しかし文字を葉研に彫るものばかりで、箆字彫は類例がない。
- 10 時香番付とは、時を計る時香盤に撒く香のように、一隅から蛇行しながら進んでゆく形である。建築工事に時香番付が使われるようになったのは、十五世紀頃からで、建築の番付としては合番・絵番付に次ぐ古い形と云われる。実例では京都府玉鳳院開山堂(一五三八)が最古である。

【付記】

以下に、二度の調査における当研究班からの参加メンバーを記す(括弧内は、当時の研究班での肩書き)。

伊藤延男(嘱託研究員)、登谷伸宏(嘱託研究員)、平野寿則(研究員・庶務)、川端泰幸(嘱託研究員)、安藤 弥(嘱託研究員)、大谷めぐみ(研究補助員)、吉田仁美(研究補助員)、松金直美(『真宗本廟(東本願寺)造営史』執筆者)、大畑博嗣(『真宗本廟(東本願寺)造営史』執筆者)、拝原祥子(アルバイト)、山下ひろ子(アルバイト)



- 注 1. 番付は発見された番付①に適合するよう付した。
2. 部屋の名称は『修理報告書』に準拠した。但し括弧を付した名称は報告書に名称がなかったので任意に付したものである。

